

特集

「日本医師会 赤ひげ大賞」 受賞を祝して

尾崎真理子医師と大平真司理事対談



令和4年度の第11回「日本医師会 赤ひげ大賞」では、大阪府医師会推薦の尾崎真理子医師（河内医師会）が、大阪では初となる大賞を受賞されました。これを祝しまして、尾崎医師と大平真司理事（広報担当）の対談を企画し、今号では当日の様態などを特集としてまとめました。

イントロダクション

「赤ひげ大賞」は、日本医師会と産経新聞社の主催により「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、平成24年に創設されました。

「赤ひげ大賞」の命名の由来である「赤ひげ先生」は、山本周五郎の時代小説「赤ひげ診療譚」を基にしており、実在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所で活躍した小川 笙 船です。黒澤明監督が映画化したことで広く知られ、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こさせます。

赤ひげ大賞は、各都道府県医師会長が1人を推薦し、選考委員による書類審査を経て、選考会で協議されます。まず「赤ひげ功労賞」受賞者を選考し、その中から5人が「赤ひげ大賞」受賞者に選定されます。

令和4年度の審査ですが、11月10日に日医小講堂で選考会が開催され、9人の選考委員と医学生グループ代表者の出席の下で審査が行われました。都道府県医師会から推薦された候補者より20人が「赤ひげ功労賞」受賞者に選定され、その中から5人が「赤ひげ大賞」受賞者に決定されました。大阪府医師会から推薦した尾崎眞理子医師をはじめ、石島正嗣氏（兵庫県）、桜井えつ氏（徳島県）、藤野孝雄氏（大分県）、大久保直義氏（鹿児島県）の5人が赤ひげ大賞の栄誉に輝かれました。

府医からの推薦で「赤ひげ功労賞」受賞者は輩出していたものの、「大賞」受賞者は初めてとなります。5年3月3日に東京で行われた表彰式・レセプションには、府医の広報を担当している大平真司理事も足を運び、ともに祝いました。今回の特集では、あらためて尾崎医師に喜びの声をお聞きしました。



表彰式での大賞受賞者5人の記念写真



尾崎 真理子

(略歴)

医療法人尾崎医院理事。昭和26年、高知県高知市生まれ。72歳。鳥取大学医学部卒。岡山大学小児科入局。その後大阪市立大学（現大阪公立大学）医学部小児科入局後、大阪市立母子センター、北市民病院を経て、尾崎医院に勤務、現在に至る。

尾崎医師インタビュー

○大平 この度は日本医師会「赤ひげ大賞」のご受賞、誠にありがとうございます。尾崎先生が長年地域で取り組んでこられた病児保育や育児支援が評価されました。

○尾崎 大平先生にご推薦いただき、このような大きな賞をいただくことができました。ありがとうございます。しかし、受賞の一報を受けた時には「私なんかとんでもない！」という気持ちでした。地域医療というのが私にとっては高齢者の認知症をはじめ、病院と連携しながら医療で地域に貢献するものと思っておりました。今回、疾病の治療だけでなく、健康維持増進、さらには子ども・子育て支援にも目を向けていただいていることに感謝しています。



大平真司・大阪府医師会理事

○大平 尾崎先生は、私と同じ河内医師会に所属しており、先生の取り組みを近くで見えてまいりました。高井康之・大阪府医師会長から各郡市区医師会に推薦依頼があったのですが、真っ先に尾崎先生の顔が浮かびました。河内医師会の佐堀彰彦会長に尾崎先生の推薦を申し上げ、府医で選考の上、日医に推薦されることになりました。尾崎先生の取り組みは「日医最高優功賞受賞記念大阪府医師会長賞」も受賞されています。実は、私の孫が昨年4月から保育所に通っているのですが、発熱などでほとんど通園できず、妻が孫を電車で迎えに行くと預かるという状況が続いておりました。その時に病児保育の重要性を痛感しました。先生の功績は十分に理解しており、尾崎先生はどう思われたかは分かりませんが、私は大賞受賞も大いにあり得ると思っていました。日医の広報委員会で副委員長を務める阪本栄・府医副会長も「インパクトのある取り組み」と評価されました。まずは、先生の実績を読者の先生方にご紹介したいと思います。

○尾崎 東大阪市は、中小規模の製造業が集積する中核都市です。30年にわたり小児医療に取り組んでおりましたが、時代の推移とともに共働き家庭が増えてきました。地域で子育て世



帯を支えることが重要だと感じておりましたので、自己資金で平成19年10月に地域子育て支援拠点事業として、主に乳幼児を持つ親とその子どもを対象としたつどいの広場「きらりっこ」を開設し、翌年に「病児保育室ウルル」を開設しました。赤字が続く中、尾崎医院がその運営を支え続け、開設以来14年間で1万2,000人以上の子ども達を見守ってきました。

○大平 病児保育は、働く親にとって大きな支えになります。具体的にはどのような体制で「ウルル」を運営されているのでしょうか？

○尾崎 病児保育は、3カ月くらいの子どもから小学3年生くらいのお子さんをお預かりし

ています。一番多いのは、保育所に通い始めたばかりの時期のお子さんです。その時期にいろいろな病気になりますので、例えば40度の高熱がある場合でも、私達の施設には小児科医がいますので、そういう状況でもお預かりすることができます。昨日まで熱があったけど、今日は下がりましたというような回復期の子どもさんもお預かりしています。ウルルではやむを得ず看護ができない働く親達も支えることを心がけています。医師、看護師、保育士などの職員が、地域の開業医や病院と連携・協力し、専門的に多角的に携わっています。新型コロナウイルス感染症が2類相当の時は、発熱の場合、1階にある診療所で検査をさせていただき、陰性であれば2階のウルルでお預かりするという体制を取っていました。5類移行後の5月8日以降も当面は同様の体制を続ける予定です。

○大平 先程施設を見学させていただいたのですが、陰圧室で感染対策もきっちりされておられました。子どもが病気の時に、医療関係者などの専門家が常駐する施設があると、保護者は非常に安心ですね。また、施設運営の観点からも保育士などの専門家が関わることで、より深い対応が可能になります。

○尾崎 おっしゃるとおりです。保護者が安



つどいの広場「きらりっこ」(内観)



つどいの広場「きらりっこ」(左から大平理事、尾崎医師と職員の方々)

心して子育てができる環境をつくることで、次世代を担う子ども達が健全に育っていきます。地域で育児を支援していくことも非常に重要だと考えています。

○大平 日々の診療でお忙しい中、子育て支援の必要性を感じ、別の事業を立ち上げられるという、大きな決断をなされたわけですが、何かきっかけのようなものはあったのでしょうか？

○尾崎 今、90歳になられたと思うんですけど、同じ小児科医の保坂智子先生が、昭和44年に関西で初めて、母親の就労と子育ての支援、子どもの権利を守る「医療機関併設型病児保育室」を枚方市で開設したことは感銘を受けておりました。私自身、子どもを抱える親として小児医療に接し、地域で子育てを支える重要性

を感じていました。自分自身は子どもが熱が出ていても、座薬を入れるだけで、そのうちおたふく風邪になっていたとか、座薬を入れ続けていたら髄膜炎になり1カ月も入院することになったというような経験をしてしまったので、そういうことがないように地域で子育てを支えるという重要性を強く感じていました。

○大平 最近では地域のつながりも希薄になってきました。子育てに関しても一人で悩む方も多いように思います。

○尾崎 現代は、地域において特に相互扶助の精神が希薄化しているように感じます。以前であれば、女性は育児に専念していた家庭も多くありましたが、昨年厚生労働省が発表したデータによりますと、仕事を持ちながら子育てをしている女性の割合は75.9%とのことでした。



病児保育室ウルル（内観）



病児保育室ウルル



つどいの広場「きらりっこ」(外観)



病児保育室ウルル（外観）

女性の社会的な地位の向上もあり、例えば、子どもが急な発熱などで2、3日保育園に通えないといった場合でも、欠勤しにくいという状況も見受けられます。

○大平 なおさら、病気の回復期、あるいは病気にかかり集団保育ができない時など、一時的に預かってもらえる施設があれば、働く親達にとって大きな安心です。一方で、長い時間子どもと向き合うことでしんどくなる保護者もいらっしゃると思います。そういう保護者にも目を向けることも必要ではないでしょうか。

○尾崎 そうですね。不安や悩みを抱えていても、誰にも相談できないこともあります。また、閉鎖的な空間で子どもと2人でいることで虐待につながり、つらい思いをされるといったこともあります。きりりっこでは、同じ年頃の子どもが集まることで、子ども達が遊べるだけで

はなく、自然と母親達のコミュニケーションの場にもなっています。大体は0歳から3歳くらいの保育園に行く前の子ども達なんですけど、屋根のある公園のような状況で遊ばせながら、そして母親同士がコミュニケーションを取り、施設内には保育士や心理士が常駐しておりますので、保護者の悩みを聞くようにしております。

○大平 今までの相談ではどのようなものがあつたのでしょうか。

○尾崎 本当にシビアなのは虐待です。母親が「虐待しているのではないかと感じる」とか、「虐待しそうだ、子どもをどうにかしてしまいそうだ、助けてほしい」というようなことをおっしゃられてきたこともあります。ここは場所的に福祉事務所や保健所が近くにあります。保健センターは走って1分で行ける場所にありますので、そういう時に専門の方々にも相談し、親子をフォローしていただいて事なきを得たということもありました。行政につなげるということも大切ですね。

○大平 相談に来てくれると、行政につなげたり早期に対応することができます。

○尾崎 自分の中で「どうしよう」という気持ちがあるんでしょうね。それを隠そうという人がやはり怖いですよ。でもそういう場所もなかった時代から比べると、ここに行ったら相談できるとか、夜泣きがすごく大変で子育てが嫌になってしまうといった時でも、先輩ママからのちょっとしたアドバイスで、「そんなの一時のことよ」とか、「こんなことがあるからそういうことになってるんじゃないの」とか言われるだけで、そうだったのか、ということでも終わりになってしまいうこともありますし。

赤ひげ大賞受賞について

○大平 3月3日に東京で行われた表彰式には、私も出席させていただきました。阪本・府

夕刊
健康ヨイコ

子供が病気で、仕事は休めない。母親の疲労と子育て支援、子供の権利を守る関西初の病児保育所「放方病児保育室」は昭和44年、小児科医の保坂智子さんが、働く母親の多かつた香里地（大阪府枚方市）で開設。その後、平成7年には国の「乳幼児健康支援一時預かり事業」として制度化された。現任医師として活躍する保坂さんに病児保育について聞いた。

全国病児保育協議会副会長
保坂智子さん
香里地（大阪府枚方市）の会社員。44年に病児保育所を開設。現在は医師として活躍する。

病児保育室とは？
保坂 平成7年から厚生労働省が「乳幼児健康支援一時預かり事業」として病児保育を定めました。子供が病気で、保護者が仕事の都合で休めないときに子育てと雇用の両方を支援するものです。対象は、保育所に通うことが困難な病児保育が必要な乳幼児とその保護者です。病児保育が不足している地域に、民間企業が施設を設け、保育士を派遣して対応する仕組みです。

保坂 昭和33年に、関西で初めて郊外型の大規模な住宅団地「香里地」が完成し、多くの会社員が移住しました。

key person



病児保育の必要性に理解を

子供が病気で休むと、大抵は親が仕事を休んで子供を育てる。保坂 子供は親の背中を見て育ちます。自分が一生懸命、仕事をしている姿を子供が見ることが大切です。病児の子供や回復期の子供が、病児保育施設で過ごすことができれば、親も安心して働けるようになります。

保坂 私は代表に就任して、約30年の施設が、現在、約10人に増えています。保坂 40年間の利用も人口10万人に1施設は必要と考えています。現在は同協会のメンバーで、約30の施設が必要で、国や自治体、病院、診療所などが、今まで以上に病児保育の必要性を理解してほしいと思います。

保坂 施設に併設されている施設を除くと、ほとんどは入居者が10人以上です。今後、少子化の重要性を考えると、施設で働く医師や看護師、保育士などのスタッフの増員も必要です。地域の関係者や同じ年代の保護者にも、病児保育の重要性を伝えていきたいです。

医副会長も、日医の広報委員会副委員長としてご出席されていました。岸田文雄首相が祝辞を述べられ、レセプションでは秋篠宮皇嗣同妃両殿下や加藤勝信・厚労大臣もおられ、本当に立派な会でした。大賞受賞を知った時、どのようなお気持ちでしたか？

○尾崎 「地域医療」に、子ども・子育て支援も含まれていることに大変感激しました。選考委員に若い医学生が加わっていたからかもしれません。選考委員の檀ふみさんや、ロバート・キャンベルさんからも大変評価されていることを伺って嬉しく思いました。

○大平 地域地域でいろんな赤ひげ先生がおられます。日医の赤ひげ大賞は、地域に密着して人々の健康を支えている医師の功績を顕賞することなのですが、尾崎先生の取り組みは、医療・介護・福祉の隙間というか行政の手の届きにくいところではないでしょうか。そこで社会貢献されていたということで大変意味が大きいと思います。

○尾崎 2025年問題を見据えて、今は地域医療というのは、行政も、住民も皆で地域ぐるみで健康保持増進をする。何とか医療崩壊をさせない制度をそれぞれの地域で構築していく。それが現在の地域医療の立ち位置です。高齢者問題だけではなくて、少子化を今食い止めないと

2040年には年金制度も崩壊します。今すぐ出生数の増加がなければ、もう日本の将来はないです。一方、私は、自分ができること、やりたいこと、それが、子ども・子育て支援でした。楽しく子育てしながら自分も充実した仕事を続けたい、と思う母親達の気持ちを大事にしてほしい。家庭と仕事の両立が可能になるよう、できる範囲で支援したい。少しでも子育て支援の力になりたい。子育て支援の環境を整えたいという思いだけでした。

○大平 高齢化社会と少子化はセットで始まります。今までは親の介護ということで介護保険制度がつくられ今も機能しています。今度は少子化ということで子ども対策が課題です。

○尾崎 少子化対策を社会保険で制度構築するという話もありますが、何らかの対策を取らないと生産人口が減ってしまう。そうすると高齢者を支えることもできなくなります。国も喫緊の課題として取り組んでいるのだと思います。

○大平 表彰式では全国から医師会関係者、メディアもたくさん来られていました。テレビカメラも見つめる中、トップバッターで堂々とスピーチをされていました。

○尾崎 広い式場の最後列にカメラがずらりと並んでいるのには驚きました。表彰状とトロ



フィーの授与、東大阪市や診療風景、病児保育室ウルルの映像が流れて、いざスピーチになった時、暗記していた文章がどこかに飛んでしまいました。焦りました。というのが恥ずかしながらの心境です。ちょうどぴったり3分でということだったんですけど、コロッと忘れてしまい、もう何が何だか分からない状況になりました。受賞された先生方の功績は多岐にわたっていました。私は子ども・子育て支援のさらなる充実や周知を願う気持ちで話をさせていただきました。子育て支援がさらに充実して、みんなに認知され、そして国の補助みたいな話や女性の働き方というようなシステムを構築していく上で私が選ばれたのかもしれないと、ちょっと大きい話になりますけれども、そういうふうにも考えてお話をさせていただいた次第です。

○大平 スピーチの中で、「もっと周知したい」とおっしゃっていました。私は先生の奮励を見ていましたが、どこからも表彰されていませんし、感謝状すら贈られていない。先生の取り組みをもっと知ってもらいたいと思い、今回の推薦に至ったというところもあります。産経新聞にも掲載され、BSフジでも特集番組が放映されましたが、施設や医院では何か変化はありましたか？

○尾崎 地域の方がどうおっしゃっておられるかは分かりませんが、診察に来られた子ども達や保護者からは「先生ってすごいことをされてるんですね」と言葉をかけられて、私的には恥ずかしさもあり嬉しい気持ちもあります。医院や、各施設で仕事をしている方々の代表として受賞した気持ちですので、これからは皆に感謝しながら地域医療に尽力したいと思っています。新聞の取材でも受賞歴を確認されましたが、本当に何もありません。1万筆以上の署名を集めて行政に陳情に行ったことはありますが。あとは講演などで病児保育のことをお話ししたことがあるくらいです。大平先生にはプロ



受賞スピーチを行う尾崎先生

フィールに書くことがなくてご苦勞をおかけして申し訳ないなと思っていました。

○大平 少子化対策の充実は望みたいですが、都会と地方とは状況が異なりますし、地域に応じた対策が必要です。赤ひげ大賞に話を戻しますが、レセプションも豪華でした。秋篠宮皇嗣同妃両殿下ともお話しされておりましたが、どのような内容だったのでしょうか？

○尾崎 正直なところ、ものすごく緊張していて、囲み取材で聞かれた時は「覚えていません」と答えてしまいました。でも、後からだんだん思い出して、殿下からは「東大阪市は中小企業の街と言われているそうですが、どんな産業がありますか？」「ロケットの部品を作っている町工場もあると聞いていますが」「子ども達はどんな様子で病児保育室で過ごすんですか？」といった話がありました。妃殿下からは、「きりりっことか、ウルルとかとても可愛いお名前の施設ですよ。どのような経緯でネーミングされたのでしょうか？」と質問されて、お答えさせていただきました。最後に「健康に気を付けて、子ども達のためにこれからも頑張ってください」と労われました。

○大平 舞台上では、医学生からの質疑応答もありましたね。日本の医療を担っていく若い

医師達に向けて、何かアドバイスなどはございますでしょうか？ また、今後増えていく女性医師達にもご助言をいただければと思います。

○尾崎 助言になるかどうか分かりませんが。私が医学部を卒業した頃は、女性は100人のうち10人くらいでした。今は医学生半数が女性という医学部も多いです。我々の時は女性が外科系につくことも本当に少なかったですが、今や整形外科、泌尿器科の医師も多いですね。やりたい仕事を男性も女性も同等にできる時代なんだと思います。若いて本当に素晴らしいです。先進医療から基礎医学まで、消極的にならず、決めつけず、どんなことにも挑戦してほしいです。頭の片隅に、「地域医療」の重要性も忘れずに持っていただけたら、嬉しいです。優秀な女子学生が医師となり、結婚・出産を経ても仕事と家庭を両立している方が多くなりました。医師としてどの分野にもどの科でも専攻できる時代です。国も医師、そし

て女性医師の働き方改革を率先して実施しています。大変ですが、ぜひ頑張っていたきたいです。

「ウルル」「きらりっこ」の将来ビジョン

○大平 尾崎先生は長い間地域で子育て支援に取り組んでおられますが、昔と今で違いのようなことは感じられますか？

○尾崎 現在、日本も欧米なみに女性が仕事を持つ時代になりました。どんな分野にも進出しています。それは国としても喜ばしいと思います。が、家庭と仕事の両立を考えると皆悩みます。それが出生数減少にもつながっていると思います。ですから病児保育事業はさらに重要になると思いますし、今まで以上に保護者の支援になるよう努めたいと思います。

○大平 私の娘も女性医師ですが、病児保育はありがたいようです。病児保育の施設がなけ



医学生からの質疑応答の様子

れば、頻繁に仕事を休まなければならなくなります。4月1日よりこども家庭庁も発足しました。国も異次元の少子化対策を掲げ、子育てがしやすい環境への取り組みを進めようとしています。このような風潮はどうお考えですか？

○尾崎 年間出生数が80万人を切りました。私達小児科医はもう少子化を止めることはできないと思っていました。でも、結婚、出産に希望や未来を感じ、子育てを楽しむためには、若い年齢層が経済的に安定しゆとりのある生活をする事です。女性の正規雇用促進、男女賃金格差ゼロ、学費の無償化、支給型奨学資金等が後押しすると思っています。仕事を休めないという方も多いので、そういう時に自分が休まなくても信頼できる病児保育に子どもを預け、自分はしっかり仕事ができるよう、縁の下で子育てを支援するのが私の役割だと思っています。

○大平 先程正規雇用の話が出ましたが、非正規雇用では育児休暇とか支援金などの対策が行き届いていません。あと、日本は欧米と違って年功序列型の給与体系で、若い頃には十分な

子育て資金がありません。資金的に余裕のある子育てが難しいかもしれません。また、日本では「小1の壁」という言葉もあります。保育園とは違い、学校に預けられる時間が短くなります。親が近くにいればいいのですが、離れているご家庭も多いです。

○尾崎 そうですね。私達は「アウェイの育児」なんて言っています。実家の助けを借りたい時でも、遠方のためなかなか駆けつけられないことがあります。アウェイの育児が問題になっていて、先生がおっしゃるような小学1年生の問題も生じている。今は株式会社が学童をつくって、いろんな習い事も連れて行くし、家にも送ってくれます。でも、費用が高かったり、なかなかうまくいきませんね。私の子どもは夫の両親の家から通いました。夫の祖父母もおり、子ども達に「誰に育てられたのか」と聞くと、「ひいばあちゃん」と言うくらいで、本当に頼りきりでした。当時から小学校に上がると迎えの時間が早くなって大変ということがありました。今も続いているんですね。



○大平 私的な学童もありますが、やはり費用がかかります。小学3年生くらいまでは子どもを一人にしておくということもしにくいですし、難しいところです。私のところは妻が専業主婦だったので、大きな問題は生じなかったと思いますが、娘の家庭を見ると、本当に大変です。子育て支援が欠かせませんし、病児保育はとても大切です。尾崎先生は今後、ウルル・きらりっこをどのように発展させていこうとお考えでしょうか。

○尾崎 コロナ禍の時はいかにして現状を維持していくかということは考えておりましたが、将来的なビジョンは深く考えてきませんでした。健康な時も病気の時も、保護者も子ども達も一緒に安心して過ごせる環境をつくっていったらと思っています。

○大平 地域の医師に求められる役割はどのように思われますか？

○尾崎 シュバイツァー博士は私の中学時代までご存命でした。神学者、パイプオルガン奏者、医師でした。私の「医師像」とは、各分野で地域住民のために精一杯自分の力を発揮する。いろんな分野に精通し、深い造詣や知識を持つ。心身ともに健康を維持し健康増進にも寄与するよう、常に正確で最新の医療知識を身に付けるよう努力する。そして、惜しみなく必要とする方々に提供する——。全然できてないですけど。自分を投げ捨て、必要とされるところで尽力したいという思いは持っています。

最後に

○大平 我が国は世界に類を見ないスピードで少子高齢化が進んでいます。2025年、2040年を見据えて地域包括ケアシステムの構築や地域医療構想の整備が協議されています。高齢者対策も喫緊の問題ですが、子ども対策、さらには保護者へのケアなども並行して考えていかなければ

ならないと思いました。今回、尾崎先生の取り組みが評価されたこともうなずけます。医師会としても様々な形でサポートしていくことが必要でしょう。今後も地域で子育て支援、小児医療に取り組まれる中で、医師会への要望もお伝え願えればと思います。

○尾崎 女性医師の医師会での活躍を期待します。地域では女性医師の役員が少ないと伺っています。女性目線で子ども・子育て支援事業に改革の目を向けていただければ大変嬉しいですね。現状の国や自治体の補助・助成体制にメスを入れ、異次元の改革をしていただきたいです。本日はこのような機会をいただき、本当にありがとうございました。

(文責：広報委員会)